2012 年 5 月　　第 29 号

NPO通信

第　２１　回　開　講　式

かわさき市民アカデミーの第 21 回開講式が 120 名以上の参加者を得て、4 月 6 日に開催されました。第 1 部：挨拶、第 2 部：記念講演、第 3 部：オリエンテーションの構成で行われました。私たちの生き方はどうなるのか、これからの日本はどこへゆくのか、アカデミーの意味はどこにあるのか等について参加者に多くの示唆と感銘を与える内容になりました。この中から和田学長の挨拶と杉田先生の記念講演の要旨を掲載いたします。

和 田 学 長 の 挨 拶

「かわさき市民アカデミー」は 1993 年にスタートし、今年 20 年目を迎えます。最初秋入学を実施し、2 年目は春、秋入学でしたので、今日は第 21 回開講式になっています。日本の生涯教育運動は高度成長終了後の社会状況の中で行政を中心として推進されました。その嚆矢は 1981 年に発足した世田谷市民大学ですが、80 年代後半に川崎市でも市立大学構想が打ち出されました。 3 年間の調査研究の結果に基づき「地域リーダー養成」を目的にした「シルバーカレッジ」を発足させることになりました。この構想の具体化を担われたのは篠原一先生と湯上二郎先生でした。私は開設時から参加しておりますが、篠原先生は世田谷市民大学の経験から「さらに幅広い市民層が参加できる市民大学」を目指され、その具体化は湯上先生が担われました。「かわさき市民アカデミー」という名称、川崎学や社会参加を入れたカリキュラム編成は、生涯学習がご専門だった湯上先生の提案でした。初期のアカデミーの理念は篠原先生の「第二のスクール時代をめざして」との呼びかけの中にこめられています。

「生涯学習」という言葉が広くつかわれるようになってからもう 10 年以上の年月がたちます。しかし、生涯学習というといまなお学校教育の補完物というようなニュアンスがあります。しかし、それでよいのでしょうか。スクールという言葉は、ギリシャ語のスコレ（ゆとり）という言葉からきているといわれています。近代社会ができたとき、ゆとりのできた子供たちに対して、社会に役立つような教育をほどこすためのスクールができました。これはたしかに成功しました。近代産業社会は、学校教育なしには考えられません。

先進国では社会が豊かになり、ゆとりがライフ・サイクルのすべてにゆきわたるようになると、第二のスクール時代の学習は産業社会に奉仕するものではなく、一人一人の精神を豊かにするとともに、それを通してゆとりある人間らしい市民社会を作り出すところに眼目があります。

こういう時代の要請を認識して自己実現につとめようという人々のつどいの場として、「かわさき市民アカデミー」ができました。これは開放性の新しい学び舎です。みんなの手で、このアカデミーを盛り立てていこうではありませんか。

初期のアカデミーは教室も定まらず苦労の連続でしたが、新しい学びと社会参加の場として行政と研究者と受講生が三位一体になって盛り立てて行こうとの考えの下に、主として先生方の主導で運営されました。講座や演習の数も増加し、2002 年度には受講生の延べ数も 5,000 名を超え、その当時で恐らく日本最大の生涯学習機関となりました。

しかし 10 年を過ぎたころ、大きな転換を迫られました。アカデミーの運営費は市の負担に大きく依存しており、市の行財政改革方針から存続の可否が問われたのです。ここで立ち上がったのが受講生たちでした。「友の会」を中心とした受講生がアカデミーの存続運動を盛り上げ、公募市民、講師代表とともに改革協議会で、真剣な討議を行いました。その結果、市民による自主運営への方向が打ち出され、ＮＰＯ法人が設立されました。また、行政はＮＰＯが自立して運営できるように移行期間をもうけ、財政援助を継続する方針が決まりました。

今年は NPO が設立されて 5 年目を迎え、運営は完全に NPO に移行しました。この間の NPO 関係者の努力は大変なもので敬意を表します。運営体制、カリキュラム編成における先生方との協働、（公財）川崎市生涯学習財団との協働体制も出来上がりつつあります。市民が主体的に運営する「学びの場、社会参加の場」としてのアカデミーが維持され、より進んだ展開をしています。この数年受講生数も延べ 6,000 名を超え、「市民による市民のための市民大学」として川崎市民の文化事業となっています。

3.11 から 1 年が過ぎました。3.11 後の中で私たちは、この国は、私たちの生活はどこへゆくのかがわかりにくい時代に生きています。だからなお一層広い見地から学びなおし、生き方を見つめなおす場としてのアカデミー存在の意義があります。篠原先生がアカデミー発足時に訴えておられた「第二のスクール」が新しい意味を持って私たちに迫っています。新しい形で「行政と研究者と受講生」が協働して作り上げる「かわさき市民アカデミー」をともにつくっていく努力を続けたいと考えています。

記念講演「3.11 をどう受け止めるべきか―政治学の視点から」　要旨

杉田　敦先生

3.11 から 1 年が過ぎた。現在、原発の再稼働が問題とされているが、ここに来て社会のなかにある忘却への衝動を感じる。「社会システムの再稼働」ともいえる現象だ。危機の中で露呈したいくつかの問題について考えてみたい。

第一は地域間格差であり、産業振興が望めない地域へ原発・基地などリスクを押しつける「犠牲のシステム」（高橋哲哉）が働いている。かといって、代替案がないまま地域から原発を取り上げることもまた、貧困リスクの押しつけとなりかねない。生産地と消費地の対立といった新たな非対称な関係につながらないよう、根本的な思考が必要である。

第二に指摘できるのは、「安全神話」に見られる社会の呪術的性格である。外国と異なり日本の原発は絶対的に安全という神話が横行した。戦前、「天皇は神」という神話を教え込む一方で、天皇機関説を「密教」として使い分けるということをしたが、それが破たんし危機を招き寄せたことが想起される。さらに日本には古くから、悪いことをいうと悪いことが起こると信じる「言霊信仰」があり、リスクの指摘が憚られる風潮がある。そこに見られるのはリアリズムの欠如だ。

三番目は、大事なことをその場の空気が決めるといった、「無責任体制」の存在である。官による規制から第三者委員会方式による規制に切り替えたが、「第三者」は実はインサイダーであり、独立性は確保されない。アメリカの場合、原発は核戦略と表裏一体のものとして、軍が民間の電力会社を規制している面がある。

また、原発事故収束の困難を見れば、絶対的な命令服従機関としての軍隊をもたない日本で、「原子

力の平和利用」が不可能であることが明らかになったようにも思われる。規制をめぐり、個別領域の専門家に全体的な政策決定を任せることも、果たして妥当と言えるのだろうか。

次に、集団・コミュニティをめぐる問題が挙げられる。阪神大震災の後には互いの助け合いが見られ、国家、政府によらない「市民社会論」的考え方が広く普及した。ただ阪神大震災の場合と異なり、広域被災の今回は、米軍、自衛隊が初期対応にあたった。政府の役割と市民社会の役割分担については、バランスのとれた考え方が必要とされる。

また、日本に見られるコミュニティのつながりは、ときに強すぎる同調圧力を招く。自治体維持の立場から人びとが現地に留まるべきと主張している首長もいるが、「移住したい」と願う人々もいて、動きたくても動けない「受難」も存在している。個人とコミュニティの要求が一致しない場合、両方のオプションを提供すべきだと考えている。

今回の経験を「なかったこと」にすることは許されない。安易な「社会システムの再稼働」でなく、経験を政策決定や日本社会の問題を考える上で活かしていかなくてはならない。

ＮＰＯ総会に参加しましょう

特定非営利活動法人かわさき市民アカデミーの平成 24 年度通常総会が下記の日程で開催されます。今年度の NPO の運営を審議する重要な場です。NPO 会員の皆様！総会に出席され、共に今後のあり方を討議しあいましょう。また、NPO 正会員以外の皆様の傍聴も歓迎いたします。

日　時：平成２４年5月２２日（火）１６：００～
場　所：川崎市生涯学習プラザ　４０１教室

議事
«議案»
（１）　平成２３年度（２０１１年）事業報告（案）について
（２）　平成２３年度（２０１１年）決算報告（案）について
（３）　監査報告について
（４）　平成２４年度（２０１２年）事業計画（案）について
（５）　平成２４年度（２０１２年）収支予算（案）及び入会金・会費（案）について
（６）　次期役員の選任（案）について
«報告»
平成２３年度ＮＰＯ活動報告と２４年度課題について

フェスタがリニューアルされます

2012 年度フェスタ実行委員長　　倉本　明

今年も秋にフェスタを開催いたします。今後、実行委員会を立ち上げて進めてまいります。１１月１７日（土）を予定していますが、場合によっては２日間の開催になるかもしれません。フェスタ開催につきましては、受講生の皆様の学習成果を広く市民に公開してアカデミーに対する理解を広めるとともに、受講生相互の交流を図る中でアカデミーの活性化をしていくという狙いがあります。

あくまでも受講生の皆様が主体となって自主的に企画、運営していくものですので、各講座、ワークショップで充分検討され、一般の市民のみなさんにもアピールしうる魅力的なフェスタにしていきましょう。発表形式や実施方法などは各講座によってそれぞれ特徴がありますので工夫が必要です。仲間の皆さんと知恵を出し合い、一つの成果に辿り着く過程で様々な交流が生まれ、仲間意識が醸成されます事を期待しております。

昨年までのフェスタと違い、今年からはフェスタ実施に伴う財団からの資金援助はありませんので、講師派遣による講演会方式の企画は極力絞らざるを得ません。なぜなら、昨年のように講師派遣料でフェスタ予算の半分以上を費やしてしまうと、全体の運営に支障を来たしてしまうからです。

今年度からは原点に返り、受講生自らが企画、実施、運営までも執り行う手作りフェスタになるよう実行にあったては皆様の深いご理解を是非お願いいたします。 フェスタというからには、来て、見て、参加して楽しい、よかった、という要素が必要です。実行委員会企画としては、物品の販売、体験コーナー、フリーマーケットの開催など地域の方々との連携をとりながらの、様々な面白い企画を用意していきたいと考えております。

フェスタの準備はこれから始まりますが、多くの受講生の皆様の自発的参画を期待しておりますので、是非よろしくお願い致します。

竹内先生への感謝

1997 年度から音楽講座・ワークショップを担当なさっておられた竹内道敬先生がリタイアなさいました。江戸の音楽を中心とした先生の名講義には多くの受講生が魅了されました。講座・ワークショップのテーマを一覧すると先生のアカデミーへの貢献の深さが改めて実感されます。

竹内先生担当講座とワークショップ（旧演習）一覧

講　座　（実施された講座のみ）

年度	前　期	後　期
１９９５	日本音楽はなぜ	
１９９６		楽しい比較音楽
１９９７	日本音楽のなぜ～邦楽の魅力と秘密～	
１９９８		長唄を聞いてみよう～長唄の名曲を聞く～
２０００	歌舞伎とその音楽～長唄を中心として～	
２００２	日本の音楽～歌舞伎をめぐって～	
２００６	歌舞伎とその音楽	
２００７		歌舞伎とその音楽
２００８	江戸歌舞伎とその音楽	江戸歌舞伎と暮らし～作る人と見る人たち
２００９	忠臣蔵をめぐって	伝説と物語の音楽
２０１０	日本音楽のなぜ	比ぶれば―日本と西欧の音競らべ
２０１１	歌舞伎あれこれ―音楽を中心として	歌舞伎さまざま―その不思議な魅力を音楽の面から見る

ワークショップ（旧演習）　（実施された演習のみ）

年度	前　期	後　期
１９９５	日本音楽の歴史の概要	日本音楽を聴く
１９９６	長唄を聴く	日本の物語を聴く
１９９７	仮名手本忠臣蔵の秘密	仮名手本忠臣蔵の秘密
１９９８	仮名手本忠臣蔵の秘密	忠臣蔵研究
１９９９	江戸時代の音楽文化史	江戸時代の音楽文化史
２０００	舞踏と音楽～浄瑠璃を中心として～	忠臣蔵あれこれ
２００１	長唄の名曲を聞く	物語と事件を音楽で聞く～邦楽の主人公たち～
２００２	長唄の名曲を聞く～多様な面をさぐる～	邦楽の名曲を聞く～「平家物語」と義経伝説～
２００３	江戸の音楽～江戸の音楽と芸能の姿～	江戸の音楽～江戸開府四百年を記念して～
２００４	江戸の音楽	歌舞伎と音楽～楽器を中心として
２００５	三味線音楽と江戸文化	日本音楽の歴史と文化～江戸庶民の衣・食・住
２００６	日本音楽の歴史と文化	日本音楽の歴史と文化～音楽と芸能で知る江戸の四季(秋冬)

『編集後記』　**牡丹花は咲き定まりて静かなり　花の占めたる位置のたしかさ**

新緑が萌え、いのちの輝く季節になりました。アカデミーも第２１回の開講式を無事終え、青年期に入りました。活力に溢れながら、同時に惑い多き時期でもあります。アカデミーの運営が正しく行われるよう、受講生の皆様のご支援をお願いします。

編集責任者：折居　晃一、田辺　初子、眞田　強、原　宏